

# 金津と古代製鉄

JR 芦原温泉駅の場所を金津かなづといいます。駅も元は金津駅と言いました。古い文書では、881年(元慶5)の興福寺所領に「金津新田」という地名があります。これよりもっと早くから、金津が栄えていたと想像できます。

金津とは、金かねの津つ、鉄を積んだ川舟が集散する川港町の意味です。

芦原温泉駅の北に細呂木駅があります。この駅のまわり約3km圏内に約30もの鉄滓(カナクソ)の認められる所があり、製鉄が盛んであったことがうかがえます。細呂木駅前には昭和45年にフィールド調査(福井考古学研究会)され、相前後して紀元前460年という<sup>14</sup>C年代測定値が公表(吉岡・大木、金沢経済大学)され、かつて古代製鉄史の話題となった遺跡もありました。

平成3年には笹岡向山製鉄遺跡(平安時代後期のもの)、平成7~8年には細呂木遺跡2号地点西側(平安時代のもの)、平成11年には細呂木遺跡1号地点(平安時代初期のもの)で考古学的調査(金津町教育委員会)がなされ、製鉄遺跡や炭窯が出てきました。

金津を流れる竹田川沿いには弥生時代から集落があります。竹田川は日本海につながり、古くから大陸と交流し、製鉄技術が伝わったと考えられます。鉄を生産し、農具が作られ、田畑は豊かな実りをもたらしました。玉造り遺跡もあり、ものづくりで、金津は栄えていたと想像できます。

芦原温泉駅から東方の山、国道八号線沿いには、北陸最大規模の横山古墳群があります。王権の格式を持つ前方後円墳が古墳時代後期に集中して造営されつづけ、西暦507年には継体天皇を送り出しました。

古代から平安~鎌倉時代まで、金津周辺で製鉄操業が続けられましたが、蒙古襲来以降に鉄需要が高まると建屋内製鉄方式に切り替わり、産地分業も進み、産業としての金津の製鉄は衰退しました。

しかし、鉄の加工、ものづくりとして、江戸時代には、金津特産 鋏と毛抜きが有名でした。

金津の歴史文化を大切に伝えていくため、NPO 加越たたら研究会では、簡易製鉄炉による鉄づくりや、金工(鑄造・鍛造)を試みています。

